

南極から附中へ

南極観測隊員のつぶやき

令和2年度 愛知教育大学附属岡崎中学校
校長通信 第34号 令和2年6月4日



○南極観測の乗り物 (part3/3 雪上車)

・乗り物シリーズ最終回は雪上車です。日本製の雪上車は、唯一の雪上車メーカーの新潟県にある大原鉄工所で作成されています。エンジンは、いすゞ自動車製を使用しています。南極では、運転免許証は必要ありませんが、大陸氷床上で雪上車を運転する予定の観測隊員は、このメーカーまで行って訓練を受けます。ギアはオートマチックなので、運転はそれほど難しくありません。車種は、マイナス80度まで使用で



きる大型雪上車、マイナス50度まで使用できる中型雪上車、昭和基地周辺で使用する小型雪上車が数種類あります。燃料は軽油を使用しています。軽油は低温になると凍るため、日本でも寒冷地やスキー場付近では低温でも凍らないウィンター軽油が売られています。南極ではもっと低温になるため、極低温でも凍らない南極軽油が使用されています。私が使用していた大型雪上車の燃費は、なんと4リットル/キロメートルです。普段使っている単位にすると250メートル/リットルになります。とっても燃費が悪いです。カーナビとレーダーが付いているので、視界が悪くてもルートを外れることはありません。エンジンのかけ方は少し特



上) 大型雪上車

下) 大型雪上車の内部、後方はベッドになっている

徴があります。まずエンジンをかける前に冷却液をヒーターで温めてエンジン本体を温めます。その後、燃料を出さずに始動モーターを回してエンジンオイルをエンジンになじませます(南極にはドロボーはいませんが、なぜか鍵が付いています)。それからやっと始動です。暖機運転後、さらにキャタピラの動きをスムーズにするために慣らし運転をします。そのため観測に出かけるために30分以上かかります。おっとキャタピラは商品名でした(電子オルガンやステイプラーを商品名で言うのと同じ)。キャタピラは日本語で無限軌道と言います。大型雪上車は滋賀県にある西堀榮三郎記念博物館に、中型雪上車は名古屋港ガーデンふ頭に展示されています。いすゞ自動車のCMに大型雪上車が出てきます。南極でのメンテナンスもいすゞ自動車が行っていますので、いすゞ自動車に勤めると南極へ行けるかもしれません。

・外国の南極観測で使用されている赤い車体のドイツのケースボーラー社製ピステンブーリーも最近、よく見るようになってきました。日本のスキー場でもよく見かけます。無限軌道の幅が広く、柔らかい雪面でも使用できます。最後に「橇」という漢字を読めますか？「そり」と読みます。下の写真は昭和基地から氷海に停泊している南極観測船へ人員が移動する風景です。橇に揺られて行きます。



海氷上を進むピステンブーリー



橇に乗って移動する観測隊員